スーパーＳＮＥ大戦

白鮭

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

友達以上恋人未満の子に頼まれてＧＭをする事になったのだが、その会場に向かう途中で俺は事故で死んでしまう。

目が覚めると自称地球の女神様が目の前に立っていて、ＳＷ２．０の世界であるラクシアに行く様に言われるのだが、俺のチートがＴＲＰＧのキャラクターを作ってその存在になる事らしい。

なので女神様と熾烈な交渉をして、どうにか自分のキャラを作る事になったのだが・・・

１８／５／３１：第二話のステータスの部分に、女神様通販（アリス様の加護）を追

加。今の所、一番使っているチートを書き忘れてました。
１８／６／０２：シャドウランの銃器改造ルールの読み間違いで、予備クリップの装弾数を間違えました。そこでＰ９３プリーダーに追加クリップを装着したので、それに伴う戦闘描写を変更をしました。
２２／５／２６：エッセンス量の間違いを修正。動物の形質等のジーンウェアには、等級がありませんので変更しました。

目　次

地球の女神様、和マンチに切れる　1
和マンチ、妖精の女神様に会う　―　8
和マンチ、初めての戦闘をする　―　19
和マンチ、冒険者のパーティーに入る　26
和マンチ、一緒にお風呂に入る　―　34

地球の女神様、和マンチに切れる

マンチキンと言う言葉をご存知だろうか？

別に月の出ている夜に、人鶏に変身するトンチキな種族の事では無くて、ゲームに於けるプレイスタイルの一種の事である。

アメリカを中心とした洋マンチと、日本を中心とした和マンチが存在しているが、俺自身は自分が和マンチだと思っている。さて、なぜこんな事を突然説明しているかと言うと……

「転移させるからキャラ作れって言ってるのに、デッドボールばっかり投げてんじゃないわよ！　いい加減にしないと怒るわよ!!」

目の前の地球の女神様が激おこしてるからである。うちのシマじゃノーカンだったから、いつものノリで作っただけだったのに。それなら最初に言って欲しかった。

＊＊＊

古い友人から連絡があったのは、今年のゴールデンウイークの予定をどうするか考えている最中の事だった。

「久しぶり、実はＧＭ探してててさ……お願い！　うちのサークルで、一回だけで良いから

ゲームマスターして！」

　そう頼まれたのだった。別にＴＲＰＧは嫌いじゃないのだが、仕事が忙しかったのと、最近の流行りについて行けなくなって疎遠になっていたのだ。

「クトゥルフもシノビガミもノーサンキュー　空想で遊びたいのに、現実世界の延長でジミジミ考えるの苦手なんだよ。俺が推理物苦手なの知ってるだろ？　後、何でＴＲＰＧでＰｖＰする必要があるんだ、ＭＭＯのギルド戦の方が手軽だぞ。めんどくさいから嫌だ」

「最近、ＴＯＲＧの復刻版が出たでしょ？　やりたいって子が何人もいるんだけど、あんなシステム誰も回した事なくてさ。確か引退した先輩から、古いシステムを引き取ったって言ってたから、持ってるかなって思って」

「……はぁ～……いつだ？」

「五月〇〇日！　……大丈夫？」

「ああ、用意しておくよ。場所はいつもの所で良いんだよな？」

「うん、あ～？身内のノリはダメだからね！　初心者対応でよろしくね!!」

「貸し一だ、精々おいしい物を奢らせてやるから震えて待ってろ」

「ぶーぶー、最低な事言うな。寧ろ奢って」

「……」

「……」

「……」

スマホを切った後、妙に静かなのに改めて気が付いた。サイドテーブルに置いてある写真立てを一瞥した後、シナリオを作る為にＰＣを立ち上げる。

「惚れた弱みかね。まあ、久しぶりに会うのは嬉しい……か？」

微妙な感じだが、悪くない気分だった。だったのだが……

当日、電車で移動中にクソ重い本を抱えて駅の階段を上っている最中、はしゃいだ子供に突き飛ばされて宙を舞った後で後頭部から落ちた。最後に思った事は、サプリにはプレミア付いてるから雑に扱わないでくれって事だった。

＊＊＊

目が覚めたら白い空間に居て、周りには俺の部屋の本棚と机が置いてあった。物凄いシュールである。

「トラックに轢かれなかったのにこうなったか。悪い事してない筈なのになぁ」

転生してファンタジー世界って言うのはゲームだから楽しいのであって、実際にそうなるのは覚悟がいると思うのだが――

「おめでとうございます!!　あなたは十億人丁度に死んでしまった人間です。特典として、日本人に今流行りの異世界転移をプレゼントいたします～!!」

――問題は目の前のハイテンションな存在に、話を聞いてもらえるかと言う事だった。

テンプレ通りにこの存在は地球の女神様で、何でも異世界の友達女神様が助けを求めていて人を送って欲しいそうなのだが、その場所が問題だった。

「ラクシアって本気かよ。あそこ一万年以上戦争してる所だろ。……友達って誰です？」

「妖精神アステリア。仲が良いんだけど最近会ってないんだ。忙しくてラクシアから離れられないんだって」

ＴＲＰＧの舞台が現実に存在するとか色々言いたい事はあるのだが、あんな危ない場所に転移させられるのは勘弁して欲しい。

「断るのはダメですか？」

「ゴメン。日本人なら喜ぶかと思って魂をカスタマイズしちゃったから、地球の転生の輪に戻せない。う～ん……ここで神様の修行でもする？　十万年くらい修行すれば、見習い位には成れるよ？」

十万年も修行なのは嫌なのだが。……考えた末、俺は転移を受け入れる事にした。

＊＊＊

「こういう場合チートが必要でしょ？　あなたの場合、魂にＴＲＰＧが染みついてるか

らキャラクターを作るのが一番なの。あなたの部屋から本棚を持ってきたから、これでキャラを作っちゃって……初期作成キャラでね」

ジト目で俺を見ているけど、俺は悪くない。たまたまアルシャードサプリのアインヘリアルを持っていただけである。アインヘリアルキャラを作れば、不老不滅と自動復活スキルで楽出来ると思ったのに。

「初期作成のキャラなんてチートとは言えないだろ、ボーナス頂戴。ＳＷ２．０の初期キャラとか言われると、軽く死ねるんだけど」

「むー、贅沢言いすぎ！　……アイテムボックスとラクシア全ての言語理解、後は別ルールのキャラを作っても無理矢理ラクシアの世界法則に合う様に調整するわ。ただし！　一ガメル百円換算として、運用コストは自前だからね」

エンゼルギアＲＰＧのルールブックを手に取っていたのはたまたまだ、初期作成キャラだったらこれが一番強いのに。物理法則を無視する第三世代型人間戦車（メンシェンイエーガー）で、何でもイチコロに出来たのに残念だ。

「もう一声」

「我儘言い過ぎ!!　う～……ＳＮＥ系ルールブックだったら経験点ボーナスをあげる。これで最後なんだからね!!!」

「版は？」

「全部良いわよ、ＦＥＡＲ系みたいにぶっ飛んでないと思うから」

そうして俺は、シャドウラン第四版のルールブックを手に取った。女神様の顔が引きつっていたが、言われた事を守っているだけである。そして、経験点ボーナスを元手に熾烈な交渉をして、サイバーパンクキャラクターに必須なアイテムの入手手段である、女神様通販を手に入れる事に成功した。代わりに経験点ボーナスは無しになったが、惜しくない犠牲だ。

女神様通販は戦闘中以外で、一ガメル一新円換算の買い物が出来ると言う優れものだ。燃料も一新円で一リッター買えるし、アイテムボックスに入れておけば、無料で各種機材の整備もしてくれる。更にお金を払えば、乗り物の修理や機材の補充や充電もしてくれるのだが、日本語に翻訳済みのサプリまでと言う枷を嵌められてしまった。

ガウスライフルや対戦車ミサイルで、何処までやれるか不安な所である。

後はキャラを作るだけだ。何だか楽しくなって来て、頭を捻りながらキャラの作成を開始したのだった。

そして、冒頭に戻る。女神様激おこ中である。

「規制対象品：動物の形質／神経増速：3と、強化遺伝子の継承者：動物の形質／神経増速：3を組み合わせてんじゃ無いわよ!!　アホか!?　後、何で種族がオークなのよ！私、ラクシアに行くって言ったわよね!?」

「オークは前衛系として見たら、低コストで強キャラだから選択しない理由が無いんだよ。一応ヒューマン風の外見取ったから、見た目は人間だし大丈夫だろ。それに、そのお陰で色々組み合わせて対弾防御レーティングが３３、対衝撃防御レーティングは３１だし。まあ魔法も使いたかったけど、流石に無理だった」

女神様がため息をついた。いや、言いたい事は分かるけど、こっちだって命がかかってるから必死なんだよ。

「一応、その体でもラクシアの魔法は使えるから、向こうで覚えれば良いんじゃないかな？　バカっぽいやり取りだったけど結構楽しかったわ。じゃあ、あっちでも楽しみなさいよ！　日本人に大人気の異世界転移なんだからね!!」

そう女神様が言った後で、意識が薄れていく。次に目が覚めた時にはラクシアで目が覚めると思い、俺は意識を手放したのだった。

和マンチ、妖精の女神様に会う

目が覚めると綺麗な花園の中で、お茶の用意をしてくれている七色に輝く髪を持った、絶世の美女が待っていた。

「ようこそラクシアへ。私はアステリア、この世界の神の一柱です。所で、アリスは元気だった？最近会ってないから、あのハイテンションが懐かしくて……」

「あ～、地球の女神様の名前の事ですか？　今初めて聞きました。あの神様アリスって名前なんですね」

「「……」」

微妙な空気が漂った後で、アステリア様がケラケラと笑い出した。

「相変わらず抜けてるわね、あの子。そう言う所も好きなんだけどね……何か凄いの送るから!!　って言ってたけど、気が抜けちゃった。紅茶で良いわよね？」

そして、俺とアステリア様、一人と一柱のお茶会が始まったのであった。

＊＊＊

現在、妖精の女神様が激おこ中である。

「アリス適当過ぎ！　向こうで強化したって言ってたけど、調整をこっちに丸投げって聞いてなかったわよ!!　ん～……？　オークって蛮族じゃないの？　人族扱いみたいだけど、調整が雑過ぎて下に降りたらレブナント化するじゃない!!　調整、調整っと……よし、終わった。はい、目を閉じてこっち向いててね」

黙って立っていると、唇に柔らかい感触が押し付けられた。ビックリしてのけ反った後に目を開けると、悪戯っぽく笑うアステリア様が至近距離に立っていた。

「妹分のアリスが迷惑をかけたからそのお詫びよ、私の加護も付けといたから蛮族をバリバリやっつけて来てね。じゃあ、いってらっしゃい」

花園から徐々に遠ざかっていて、気が付いたらキノコの輪の中に立っていた。

「森の中って言うのがアステリア様らしいけど、場所が分からないのがなぁ……」

アイテムボックスの中には、アリス様の所でキャラ作成時に買ったアイテムと、アステリア様が入れてくれたらしい千二百ガメルが入っていた。一ガメルを出した後で、もう一回アイテムボックスに仕舞って仕様を確かめた後、女神様通販のＡＲをサイバーアイに投影してみる。

「ステータス表示機能とマップ表示機能が追加されてるな。良く見たら、Ｖｅｒ．１．０１　Ｂｙアステリアって書いてあるし……ステータスは調整してあるって言ってたから見てみるか。ポチっとな」

ＡＲ上に表示されたステータスだが、ＳＷ２．０のキャラクター表示とシャドウランのキャラクター表示、それとアリス様の加護とアステリア様の加護が入り混じって、おかしな事になっていた。

＊＊＊

種族：ナイトメア（種族：オーク特性を加算）　生まれ：ストリート・サムライ
冒険者レベル：１／１５　穢れ：１
器用度：１７（＋２／　＋５（　７）＝（＋　９）＊：敏捷度（サイバーウェア）
敏捷度：１４（＋２／　＋５（　８）＝（＋１０）＊：反応力（サイバーウェア）
筋力　：２０（＋３／　＋５（　７）＝（＋１０）＊：筋力　（サイバーウェア）
生命力：１８（＋３／　＋８（１２）＝（＋１５）＊：強靭度（サイバーウェア）
知力　：１７（＋２／　＋５（　）＝（＋　７）＊：直観力と倫理力の合算
精神力：１８（＋３／　＋２（　）＝（＋　５）＊：意志力

エッセンス：２．４９　エッジ：３　イニシアティブ：１７（敏捷度ボーナスと知力ボーナスの合算）
イニシアティブパス：４　ＨＰ：６３　ＭＰ：１２３
規制対象品：動物の形質／神経増速：３

規制対象品：レッドサムライアーマー（カブトヘルメット付き）
強化遺伝子の継承者：動物の形質／神経増速：3
ヒューマン風の外見（見た目が人間、異貌状態でも変わらない）
インプラント適合性（バイオウェア）
アイテムボックス（アリス様の加護）
ラクシア全ての言語理解（アリス様の加護）
女神様通販（アリス様の加護）
妖精の目（戦闘特技：精密射撃、鷹の目、狙撃／アステリア様の加護）
加護の使い手（戦闘特技：魔法誘導、魔法収束、魔法制御、ＭＰ軽減（神聖魔法：アステリア、精霊魔法）魔力強化Ⅱ（神聖魔法:アステリア、精霊魔法）魔晶石の達人、ダブルキャスト、キャパシティ、魔法拡大：威力確実化、確実化、数、距離、時間、範囲／アステリア様の加護）
＊聖印、宝石を装備しなくても魔法の使用が可能（体自体がアステリアの聖印扱いであり、精霊魔法に対するゲート扱い／アステリア様の加護）
戦闘特技：両手利き
苦手：ハッキング
苦手：電子戦

アレルギー：汚染物質（一般／軽）
精霊との反発性（昆虫精霊）
ＳＩＮ持ち（標準）
弱点属性：土
プリースト：アステリア　１５（アステリア様の加護）
フェアリーテイマー　１５（アステリア様の加護）
ファイター　１　刀剣＋５、回避＋４
シューター　１　自動火器＋５、ピストル＋４（ヘビーピストル）＋２
スカウト　１　運動技能グループ＋１、知覚＋１、潜入＋２
先制力＋１７
ライダー　１　地上機全般＋１
ＨＰ強化
＊加護による戦闘特技の取得と、種族特徴の強化は不可能
残経験点：５００　残カルマ：０（経験点１００毎に、カルマ１点に変換可能）
動物の形質／神経増速　：３（スタンダード）エッセンス：１．３５
骨密度強化　：４（スタンダード）エッセンス：１．０８

筋肉強化　…2（スタンダード）エッセンス…0．36
筋肉調律　…2（スタンダード）エッセンス…0．36
サイバーアイ　…4（アルファ　）エッセンス…0．4
スマートリンク（3）
大光量補正（1）
低光量視野（2）
熱映像視野（2）
視覚強化…3（3）
映像拡大（2）
アイレーザー・システム（3）
アイレーザーマイク…3
アイレーザー測距器
サイバーイヤー　…3（アルファ　）エッセンス…0．32
聴覚強化…3（3）
平衡強化（4）
ダンパー（1）
音源探知（2）

可聴域拡大　（1）
レッド・サムライ・アーマー
カブト・ヘルメット
機動力アップグレード：2
筋力アップグレード　：3（3）
ジャイロマウント　（4）
油圧ジャッキ　：4（5）
耐火：6
断熱：6
絶縁：6
フォームフィッティング・ボディーアーマー
シャツ
フルボディー・スーツ
アーマージャケット
バリスティック・シールド
ヘルメス・アイコン
アイリス・オーブ

分析：3、検索：3、命令：1、編集：3
ＢＬＴ／ホットシム
スキンリンク
ナノペースト・トロード
ＦＮＰ９３プリーダー
フラッシュライト　（低光量）
電気式発火
外部スマートガン　（上部）
ガスベントⅢ　（銃身）
高速連射化　（２）
追加クリップ　（２）
測距器改良　（１）
近接対応　（１）
スリング
予備クリップ４２本（１クリップ５０発）
通常弾１０００発
コルト・マンハンター　（レーザーサイト付き）×２

内部スマートガン
近接戦対応　（1）
測距器改良　（1）
カスタムグリップ　（1）
銃身延長　（1）
アンダーバレル・ウェイト（2）
予備クリップ11本（1クリップ16発）
通常弾180発
クイックドロー・ホルスター×2
カタナ
武器整備キット
医療キット：6
クライスラー・ニッサン・パトロール1
コネ：地球の女神様アリス（6／6）　妖精神アステリア様（6／6）
1200ガメル
＊＊＊
……うん、色々と酷い。最初は大した事無いと思ってたけど、女神様の加護×2

とＳＷ２．０のキャラクターとストリート・サムライが組み合わさって、アホみたいに強くなってるし。

「でも、これは必要なかったかも」

　そう言いながらコムリンクを取り出す。これはスマホが進化した物で、これ一つでＡＲの制御やＶＲモードへの移行、ハッキングも出来るしゲームも出来る上に、自分の持っている電子機器全ての制御なども行えのだ。スマートガンの制御用に買ったのだが、それ以外に使わないんだよな。そう思っていたら、電話がかかって来た。

「もしもし？」

「アステリアよ。電話は繋がってるし、私もたまに見てるから。後、アリスにも電話は繋がってるから困ったら連絡ちょうだいね。それと、君の名前を聞いて無かったんだけど教えてくれない？」

　遂にやって来た、ＴＲＰＧ最大のイベント名前付けである。元々こっちに呼ばれた理由がアステリア様の手伝いである以上、蛮族と戦う必要があるから冒険者になるのは必須なのだが、それなら本名じゃつまらない。

「アステリア様、俺の外見ってどうなってるんですか？」

　そう言うと、待ってましたとばかりに嬉しそうに言って来た。

「私の眷属に相応しく、物凄くカッコ良くしといたわよ。知り合いが見ても一見だと分

からないと思うけど、ベースは本人だから仲が良い人だと気が付くかな。で、名前は？」
「んー……グラムで。グラム・アリステア、これが俺の名前にします。アリス様、アステリア様、これからよろしくお願いします」
いつの間にかアステリア様の眷属にされたみたいだけど、結構気が合う女神様だったし、加護も貰ったので、アステリア様の為にもがんばろうと思う。
俺は森から出る為に歩き出した。ラクシアと言う新しい世界で、俺は冒険者になる。これから起こる事に、俺自身がドキドキしていた。

和マンチ、初めての戦闘をする

女神様通販のマップ表示機能で現在位置を確認すると、フェイダン地方に降りた事が分かった。

「ここから近いのはリオスかな？　道の状況にもよるけど、パトカーを使えば大抵の所には行けるからな……大都市に行って冒険者になるのが手っ取り早いか」

そうマップを見ながら呟いて、取り合えず森を抜ける為に街道に一番近い場所へ向かって歩き出したのだが、装備のテストもしたいので、レッド・サムライ・アーマーをアイテムボックスから直接体に装着してみる。

「……慣れればメタルヒーローごっこが出来るな。パワーアシスト機能と、油圧ジャッキの性能も確認しておくか」

森の中で軽く走ってみたり、ジャンプしながら先に進む。特に油圧ジャッキの効果が凄い、なにしろ軽く助走を付けてジャンプすると、五メートル以上飛ぶのだ。元の体とは比べ物にならない位に運動神経が良いし、何より凄い楽しい。レッド・サムライ・アーマーにしても、機動力アップグレードとパワーアシストのお陰で動きやすいのだが、鎧と言うよりパワードスーツに近いから、これを着て長時間歩くのは無理だと思う。そん

な事を試しながら移動していると街道に出たのだが、森から出た所で何か戦闘をしている集団がいた。

＊＊＊

箱馬車三台がキャラバンを組んで進んでいたらしいのだが、前後から襲われたみたいだ。馬車を襲ってるのは前十名、後ろ十名の馬に乗った人間で、そいつらを見たらデーターがサイバーアイに投影された。それによると、馬に乗った山賊と表示されている。

「えー……」

ますますゲームじみていて来ていて、この世界を現実と認識出来なくなるのではと少し心配になったが、大丈夫だと信じたい。突然のデーター表示を疑問に思っていたら、女神様通販のバージョンが1．02　Ｂｙアステリアに変わっていて、アナライズシステムが追加された結果みたいだ。

前は結構装備が良さそうな五人が戦っているが、後ろにいるのはたったの三人で、しかも装備の余り揃って無さそうな女の子ばかりだ。

「少し離れろ!!」

そう声を掛けて、二十メートル位離れている所から、神経増速によって加速した神経を使って、長バーストで銃弾をバラ撒く。

パパパパパパパパパパパッン、パパパパパパパパパパパパパッン、パパパパパパパ

パパパパッン、パパパパパパパパパパパパパパパパパパッン、パパパパパパパパパパパパパパパパパパパパパパパパッン……

Ｐ９３プリーダーはブルパップ方式のＳＭＧなのだが、高速連射出来る様に改造されており、しかも使い手である俺は、神経増速によって三秒間に四回行動出来る。

反動補正装置を組み込まれたレッドサムライアーマーと、銃本体に組み込まれたガスベントや各種装置によって限界まで反動を補正、そして、サイバーアイに投影された各種銃器データーを確認しつつ、強調表示された標的に向かって、赤い照準（クロスヘア）が合った瞬間に機械の様な正確さで銃弾を叩き込む。

１．５秒で最初のクリップ使い切って、スマートガンで即座に二本目のクリップに切り替える。二本目のクリップの弾を半分ほど使った後、空になったクリップを思考制御で自動的に抜いて、アイテムボックス経由で新しいクリップを挿す。だが、既に馬上に人影は存在しなかった。

戦闘が続いている前方に向かって走って行き、アナライズシステムの表示を確認、山賊の首領と出た目標に対してプリーダーを向ける。

「降伏しろ、お前が馬で逃げるより銃弾の方が速いぞ」

全員が後ろの惨状を理解したのか、青くなって武器を捨てた。監視を続けながら、装備の整っている冒険者に話しかける。

「緊急だと思って勝手に割り込んだ、悪かったな」
そう言うと、冒険者のリーダーらしき青年が苦笑しながら返して来た。
「いや、助かった。あの人数だと俺達はともかく、後ろのルーキーが不安だったんだ。こっちの人数を割こうにも、下手したら護衛対象に取り付かれるから、内心困ってた所だったからな。俺の名前はアレックス、梟の目のリーダーだ。よろしくな……え～っと……」
そう言って手を伸ばしてくるので握手をしようとするのだが、全身隈無くレッド・サムライ・アーマーに包まれているので少し困る。さっき試したアイテムボックス式装着術を、フルボディー・スーツとアーマージャケットで試してみると上手く行ったので、装備を変更してから握手に応じる。
「こちらこそよろしく、グラム・アリステアだ。冒険者になる為にリオスに向かってる田舎者で、都会に出るのは初めてだ。助かったと思ってくれたら、良い冒険者の店を紹介してくれ」
そう言ってアレックスに笑いかけたのだが、アレックスが俺の顔を見て赤くなった……アステリア様の眷属になったお陰で男も魅了出来る顔になったのか、アレックスが特殊な趣味なのかは判断出来ないが、頼むから前者でいてくれとアステリア様にお願いしておいた。

＊＊＊

アレックス達が、盗賊を拘束して馬車の後ろに繋いでいるのを俺も手伝っていた。とは言っても監視役として見ているだけだ。その代わりに、俺が倒した盗賊の戦利品の権利が俺にあるらしいので、探すのを手伝ってもらう。流石にラクシアに来たばっかりで、死体の懐を漁るのはキツイのだ。

「失礼、先ほど助けて下さったのはあなた様で良かったかしら？」

後ろから声を掛けて来た人物を見ると、黒髪で青い瞳と白い肌をした何となく気品がありそうな、多分十五～六歳位のスタッフを持って、ソフトレザーを着た女の子だった。

「はい、そうですが……何とお呼びすればよろしいでしょうか」

「エリシアと呼んで下さいな。実は貴方を雇いたいのですけれど、どれくらい払えば良いのかしら？」

エリシアさんはそう言って来たのだが、正直困ってしまった。ルルブには最初の冒険は五百ガメルと書いてあった気がするが、プリーダーの弾代は結構高くて、一クリップ百ガメルもするのだ。

「まだ正式に冒険者にもなってないのですが……相場だったら五百ガメルで良いのですが、さっきの連射出来るガンの弾が高いので、あれを使わないのでしたら五百ガメル、使うのでしたら千ガメルですね」

そうすると、エリシアさんは不思議そうに首を傾げていた。
「普通、ガンの弾って十二発で五十ガメルですよね。あの短時間に何発使ったのですか？」
エリシアさんと話をしていたら、ライフルを持った女の子がだんだんと近づいて来た。俺はさっき使ったプリーダー用のクリップをアイテムボックスから取り出して、エリシアさんに見せながら説明した。
「この箱型の装置に５０発入ります。さっき使ったガンには、この装置が二つ付けられるのですが、約６秒で空になるんですよ。金額的には十発二十ガメルで安いのでｓ……」
「こ、こんな中に５０発も入るんですか!?　それに連射って……あんなガンは資料でも見た事無いです!!」
さっきからズリズリ近づいて来ていた子が俺とエリシアさんの中に入って、予備クリップに視線を固定したままで話を聞いていた。
「……エリシアさん知り合い？」
そう聞くと、彼女は楽しそうに頷いた。
「はい、彼女も私達のパーティー、薔薇の騎士のメンバーの一人です。グラムさんは私達のパーティーに入って、一緒に冒険をして下さいな」
そう言って、エリシアさんは俺を見ながら微笑んだのだった。

＊＊＊

「う～ん……」

ラクシアに来て初めての実戦が、蛮族じゃなくて人間だったのに動揺してないのが不思議だ。後方から攻めて来ていた十人は、俺が全部倒したのに平穏を保っているのが不思議と言うか、不自然と言うか……何かモニョモニョする。

それと隠れて見ている積りなのだろうけど、俺を監視している人間がいる。と言っても変な人物では無く、さっき助けた三人組の内の一人だ。ライフルを持っていて、マギスフィアが浮かんでいるから、銃の話が聞きたいのだと思う。

一応パーティーメンバーだと言うのに、俺は彼女の名前すら聞いて無い。雇い主兼パーティーリーダーは、本人から名前を聞いて下さいなとか言って、教えてくれないし……

そっちを向いて手を振ると、仮称ライフル子ちゃんは、動いている馬車の陰に隠れてしまう。苦笑しながら馬車の横をのんびりと歩く。リオスに着くには、まだ時間がかかるみたいだ。

和マンチ、冒険者のパーティーに入る

夕方近くになり、今日の目的地であるアンデルリーブスに到着した。本来だったらもっと早くに着いていたのだが、盗賊集団を引き連れていたので時間がかかったのだ。

「ようやくリオス国内に入ったか、ラスベートまではまだ遠いから気を抜けないけどな。しかし、賞金首の報酬を譲ってもらって良かったのか？　グラムが捕まえたようなものだったろ」

盗賊達を衛視詰め所に引き渡して気が抜けたのか、隣を歩いているアレックスがのんびりした様子でそんな事を言ってきた。

「賞金だって沢山出た訳じゃないし、受け取ってアレックス達のパーティーから不満を持たれた方が損だろ。一応、エリシアさん達のパーティーに入るって依頼を受けて前金を貰ったしな」

俺がそう言うと、アレックスは微妙に苦笑したような表情をした。

「あ～、あのパーティーの依頼……ねぇ……グラムは冒険者の店を通してないから判断出来なかったんだろうけど、依頼自体は合神領アルバからの正式な物で、裏とか怪しい物は無いんだよ。ただ、あそこは今お家騒動があってキナ臭いんだよな……まあ、そう

言う訳だ。暗殺者には注意しろよ」

そんな話をしながら歩いていたが、アレックスには先に宿に戻ってもらう事にする。いくらアステリア様の加護で聖印も宝石も要らないとは言え、流石に聖印無しで神聖魔法を使うのはアステリア様に申し訳ないので、聖印は買っておく。宝石に関しては、謎空間に収納してあると言って誤魔化すが。それと、細々とした物もついでに買う。

そして、女神様通販はＶｅｒｌ．１２　Ｂｙアリスにいつの間にかバージョンアップしており、一ガメル百円換算で地球の日用品が買える様になっていた。武器や乗り物は買えないみたいだが、そっちはシャドウランのアイテムを買えば良いだけの話だから気にしてない。

「アリス様もありがとうございます、色々気を使って戴いて感謝しております」

そう言いながらアリス様にも祈っておいた。サイバーアイに表示されている時間を見ると、そろそろ夕食時である。これからパーティーメンバーと一緒に食事を取る約束をしているのだ。前金で千ガメルも貰ってるし、アレックスの言っていた事を考えると嫌な予感しかしない。

「後金で二千ガメルもくれるって言ってたし、何やらされるんだろう……」

経験不足がモロに出た結果になりつつあるので、戦々恐々としながら宿に向かった。

＊＊＊

アンデルリーブスは結構大きな村で、薬草栽培でにぎわっている事と、アイヤールからの湯治客がノイに向かう陸路の中間地点と言う事で、村と言われると首を傾げるような規模なのだが、そんな中でも事前に予約でもしてあったのか、結構高級そうで大きな宿屋に全員で泊まる事になった。

お金は雇い主がまとめて払ってくれるそうなので、懐には優しいが俺の精神には全然優しくない。馬車に乗っていたらしいメイドさんの案内で個室に連れて行ってもらい、ノックして部屋に入るとエリシアさんとライフル子ちゃん、後プレートメイルを着ていた俺に絡まなかった女の子と、ロリっ子がいた。

「お招きいただきありがとうございます」

そう挨拶した後で席に着く。女神様通販で地球の物を買える様になったので、水浴びついでに髪と体を洗ったり、服を買ったりしたので身綺麗にはなっている。

俺が席に座ると、上座に座っている銀色の髪で水色の瞳と白い肌のロリっ子が言ってきた。

「薔薇の騎士のメンバーなんですから、敬語なんて要りませんよ。私はアーネシルド・マリーシア・アルバ。見ての通りエルフで、合神領アルバのアステリア神殿の名目上のトップです。よろしくお願いしますね」

そう言って微笑んできた。それに続いて他の人たちも自己紹介をして来るが、何やら

エリシアさんは拗ねている感じに見える。
「アーネは意地悪です。グラムにはみんなと仲良くなるのに、時間をかけて欲しかったのに。エルは人見知りだし、ジルはお堅いし。これからラスベートで生活するんですから今まで通りには行きませんのよ？　……さて、私はエリシア・ステイシー、人間の魔術師でこのパーティーのリーダーをしています。よろしくお願いします、グラム」
　次に答えたのはプレートメイルを着ていた女の子、プラチナブロンドで紫色の瞳と白い肌の子なのだが、見ただけで真面目そうな雰囲気が漂ってきそうな、何とも委員長タイプな感じの子だ。
「ジルーネ・ハルシオンです。よろしくお願いします」
　ジルーネって子は俺に不満があるみたいで、表情に不信感がありありと浮かんでいる。今まで三人……四人？　でパーティーを組んでいたのに、いきなり知らない人間を入れるって言われたら、そうなるのも分からなくもないので仕方が無いとは思う。
「ごめんなさいね、ジルは三人だけでアーネを守れるって聞かなくて……昼間に出た盗賊の集団に私達だけじゃ負けてたのに、意地を張ってるの。長い目で見てくれると嬉しいかな？」
　そう言ってエリシアがフォローを入れてるが、本人はそう言われてバツの悪い表情をしていた。根は悪くない子だと思うので、焦らない事にする。

「よろしく、ハルシオンさん」
「……パーティーのメンバーなので、ジルーネで良いです」
うん、悪い子じゃ無いと思う。
最後は、ある意味エリシアより目立っていたライフル子ちゃんだ。薄い紅茶色の髪に緑の瞳、白い肌でとがり耳なので、エルフなのだと思うのだが、見た目より性格の方がインパクトがあったので、ラクシアに来てから一番印象に残ってる子だ。
「……エルジィ・リースン……です。魔動機師……よろしく」
上目遣いでぽそぽそと自己紹介してくれるが、今までの行動を考えると、マギテックの事が関わると性格が変わるタイプなのだと思う。ＴＲＰＧを趣味にしていた俺の周りには、それなりにいたタイプだからある意味なじみ深い。
こういう子は、慣れて来れば普通に付き合えるようになるから、最初は時間がかかるのだ。しかし、ラスベートまでの期間限定だと思っていたのだが違うのだろうか？
「よろしく、エルジィ。で良いか？」
「うん……後で……マギテックの話をしよ……」
そう言われてもな……俺のは純粋に科学の力だし、少し困る。
「俺は魔動機師じゃないから、マギテックの事分からないんだよ。別の事じゃダメか？」
「嘘！　ガン使ってたのにマギテックじゃ無いの!?　……あ、そう言えばマギスフィア

持ってなかった。どうやってガンを使ってるの？うわ～、すっごい気になる。その辺の事いっぱい教えてね！」

やっぱり俺の周りにそれなりにいたな、多分一番仲良くなるのが早いタイプだ。

「用事が終わったらな。で、色々と深い部分が聞きたいのですが……あ～、聞きたいんだけど良いか」

そう言うと、食事をしながらアーネシルドに詳しい話を聞く事が出来た。

「合神領アルバはアイヤールで二番目に新しい領で、場所は赤砂領レザナードの南東側にあります。名前の通りに神殿に対して優遇措置を取って、領全体をを門前町化する目的で作られました。まあ、他の意図もあったのですが。グラムは戦闘をする時に、一番必要な人材って誰だと思いますか？」

色々いると思う。特に先制を取れる人と傷を癒せる人……ああ、なるほど。

「領全体で人材派遣をやったのか。そう言う所って、人以外に産業が無い場合が殆どだから、それを門前町で補うと……上手く行けば良いけど、失敗すると領を乗っ取られそうだな」

そう言うと、アーネシルドはため息を付いた。

「アルバの誘致に乗ったのは、ティダン神殿、アステリア神殿、グレンタール神殿、シーン神殿、ザイア神殿です。お父様が生きていた時はきちんと統制が取れていたのです

が、三ヶ月前に亡くなってしまって……

私を含めた残された子供の母親が、誘致した神殿の有力者の子女なんです。誰を後継者にするのか揉めていて、身の危険を感じて、ラスベートの紫露草女学院に留学名目で逃げ出している所なんです。あそこの隣には、アステリア神殿もありますから丁度良いですしね」

俺はおもいっきりお家騒動に巻き込まれたのか、道理で報酬が高い訳である。それを思って苦い顔をしていると、アーネシルドも申し訳なさそうな表情をしていた。

「ここに居るみんなは私が幼い頃から付き従ってくれていて、逃げ出す時も一緒について来てくれた大切な人達です。苦労をかけてしまってますが、アルバに居る時より自由になりましたから、みんな冒険者になるって言ってます。

私は流石に無理なので、アステリア様のプリーストを探そうと思っていたのですが、その時に私より凄いプリーストに出会ったのですから、アステリア様の思し召しですね……逃がしませんから」

そう言いながらにっこりとアーネシルドが笑ったのだが、全然嬉しくない。アステリア様の試練かと思っていた時に、サイバーアイにこんな表示が現れた。

アス：私は何もしてない。このロリっ子が自分で引き当てた運命だけど、面白いから手伝ってあげなさい。それと、リオスって私の信者が少ないから増やしておいてね、こ

れは神託だからよろしく。

そうサイバーアイに表示された。慌てて女神様通販を確認してみると、Ｖｅｒｌ．１３　ｂｙアステリアになっていて、ショートメッセージ機能とブックリーダー機能が追加されていた。ついでにアステリア関連の書籍が大量に送られてきたので、アステリア様の聖職者としての勉強を始める事にする。

こうして冒険者パーティー、薔薇の騎士の一員としての生活がスタートした。所属している冒険者の店はまだ無い。

和マンチ、一緒にお風呂に入る

食事の席ではその後は、めんどくさい話はしなかったのだが、それぞれの興味がある事柄について色々と質問された。

アーネシルドにはプリーストとしての事を聞かれたのだが、神聖魔法は凄いのに神殿の事について何も知らないのに物凄く驚かれた。森で暮らしてたとか適当な事を言っておいたが、恐らく誤魔化されてはいないと思う。ただ、聖職者の勉強を一緒にしようと言ってくれたのはありがたい。向こうにも思惑はあると思うが、こっちだってアステリア様の神託もあったからには、リオスのアステリア信者を増やす必要があるからだ。神殿の事を知らないでは済まされない状態になっているのだし。

エルジィは当然ガンについてだ。第六世界（シャドウランの世界の事）とラクシアを比べると、世界観はともかくとして、技術についてはお互いに良い所と悪い所はある。簡単に強力な魔法が使えると言う意味ではラクシアの方が進んでいるし、サイバーウェアや各種機器によって人以上のことが出来る第六世界の技術は驚異的だ。何が言いたいかと言うと……

アス・グラム以外には、通販で買った武器は使えない様にロックを掛けておいたから。

後、技術を直接伝えるのも禁止。多分いないでしょうけど、レパラールクラスの技術者がいれば銃の再現は出来ると思う。それがどれだけ危険かは分かるでしょ？　グラムがラクシアに来てくれて感謝してるけど、あの盗賊集団との戦闘は正直ドン引きしたわよ！　……もう一回言うけど、銃を広めるのは禁止だからね。

アステリア様に禁止された以上は仕方ない。

「うちの一族の秘伝だから、ガンについては教えられないんだよ。一子相伝の流派みたいなものだから勘弁してくれ」

こう言って誤魔化しておく。アーネシルドは俺の方を見てにこにこしながら聞いているし、エルジィはちょっと拗ねた感じになってしまったが、アステリア様の言ってた事は俺も賛成なので勘弁して欲しい所だ。

ジルーネはレッド・サムライ・アーマーに興味を持った。これは第六世界の千葉に本拠地を置く日系企業、レンラク・コンピューター・システムの企業特殊部隊、レッド・サムライの象徴的装備で物凄く強いのだが、手に入らないかと言われるとやっぱり困る。

アーマーも多分武器扱いだろうし、仮に渡せたとしても整備が出来ないだろう。アイテムボックスに入れておけば整備が終わっている俺とは違うのだから、渡しても意味が無い。

「残念だ、あの赤い鎧はアムザみたいな物なのだろう？　アーネの傍仕え兼、護衛役を仰

せっかっているのに、やれ女はダメだとか後ろに下がってるとか、アルバに居た時に散々言われたからな。特にザイアの神官戦士は性格が悪い。

だったら、身体全部覆ってしまうアムザを使えば良いと思っていたのだがな。ただ、私はヴァルキリーなのでドラゴンライダーにも憧れているし、難しい問題なのだ。グラムの考えを聞かせてもらえないだろうか？」

話を聞きながらエリシアの方を見ると、苦笑しながら肯いているので間違い無いはず、好きな子に良く見られようと思って空回りして、ガチで嫌われてしまうと言うやつだ。実際、薔薇の騎士のメンバーは顔で選んだんじゃないかってってくらい美少女揃いなので、そう言いたくなるのも分かるのだが、本人の希望もあるからな……

「性能は良いけどアムザは高いからな。ミスリルプレートを買って、最終的にはインペリアルの方が良くないか？　お金は良い騎獣を手に入れるなり、貯めておけば良いと思うぞ」

「やっぱりそうなるか……グラムは、私みたいなのが戦うのをどう思っている？」

真剣な表情でそう聞いて来た。今までよっぽど嫌な思いをして来たのだろうと思って、少し可哀想になって来る。

「本人がやりたいって言ってるんだから、良いとは思うんだけどな。問題は適性があるかって所なんだけど……」

そう言って、アーネシルドを見ながら話しかける。
「アーネシルド、ジルーネに適性はあるのか？　自分の命が掛かってるんだから、正直に言ってくれ」
そうすると、アーネシルドはジルーネを見ながら真剣な表情で言う。
「ジルーネは私の騎士です。他の誰も代わりにはなりませんし、するつもりもありません。私の命は貴女が守るのですよ。良いですね、ジルーネ」
それを聞くと、ジルーネは嬉しそうに答えた。
「はい！　アーネの為にも一層努力します……グラムもありがとう。私は認められているって事で良いのだな？」
そう言っているので、苦笑しながら追加しておいた。
「それはジルーネの実力を見てからかなぁ……俺も実戦は昼間のやつが初めてだったから、人の事を偉そうに言えないんだよ。俺こそ見捨てられない様にがんばるよ、よろしくなジルーネ」
「そうだったのか……では、先輩として良い手本になるように私も努力しよう。これからよろしく頼むぞ、グラム！」
そう言って嬉しそうに笑った。おお、美少女の笑顔は良い物だな。後はジルーネが張り切り過ぎて、俺がボコられない様に注意しなければと思う。

「エリシアは何か質問は無いのか？」

そう聞いてみたのだが、答えは簡単だった。

「無いです。私の場合は、アステリア様の教えに従っただけですから。こう……ピピピッと来たので話しかけただけですよ。本能を愛し、直観を信じよ。それが自然なりって言う事です」

そう言って笑っていた。これを聞いて、実はアーネシルドよりエリシアの方がよっぽど曲者じゃないかな？　と思ったのは秘密にしておこうと思う

＊＊＊

部屋に戻ってやる事が無くなったので、アステリア様から貰った本をブックリーダーで読んでいた。と言っても、いつもの通りにサイバーアイに投影しているだけなのだが。ＡＲ凄い便利、さすが第六世界は俺が居た地球より、技術が進んでいただけの事はある。

コンコンコンコン

ノックの音が聞こえて来たので出てみると、エルジィが立っていた。

「どうした、何か用事か？」

思い当る節が無いので聞いてみると、もじもじしながら上目遣いで俺に聞いて来た。

「……使った…武器……整備しないと……ダメ」

そう言って、じーっと見つめて来る……かなり困った事態である。

プリーダーは高性能のＳＭＧなのだが、その一つに電気発火機構を備えていて、可動部分をほとんど取り除いていると言う所がある。弾丸も専用品を使っていてケースレス弾だ。

エルジィは、さっき俺が言った事を自分なりに考えて、見て理解しようとしているのだと思うが、プリーダーを理解するのは流石に無理だろう。

グラ：教えはしません、見せるだけです。

アス：私は直接伝えるのはを禁止しただけ、後は何も言わないから。

エルジィの事を部屋に入れてあげた。仕方が無い、マンハンターのクリーニングをするか……その時の俺はそう思っていただけだったのだが、この選択をかなり後悔する事になるとは思わなかった。

＊＊＊

コルト・マンハンターは標準的なヘビーピストルで、内蔵機器もレーザーサイト位だから難しくは無いと思う……改造しまくったせいで色々複雑になってしまったが、プリーダーよりマシだ。弾だって薬莢付きの普通の弾だし。それをアイテムボックスから出して、次に武器整備キットを出す。

「１Ｈガン？」

最初はガッカリしていたみたいで、大人しく反対側で見ていたのだが、直ぐに内部構造が複雑で違う事に、エルジィも気が付いた。
「昼間に使っていたのがＦＮ　Ｐ９３プリーダー、近距離で多人数を相手にするのに使うガンだな。５０連クリップを二本装填出来て、威力は昼間見た通り。で、こっちはコルト・マンハンター、さらに近距離で使うガンだ。
１６連クリップだから装弾数は少ないし、射程距離だって短いが、威力はこっちの方が上だし小さいから、室内とかで使うのが本来の使い方だな……俺の場合は、二丁同時に使うって変則的な方法を取るけど……エルジィ？」
いつの間にかエルジィが背中に張り付いていて、少しでも近づこうと俺の肩越しに頭を出して見ている。俺は少し本を読んだ後で寝るつもりだったので、Ｔシャツ一枚だったし、エルジィもそのつもりだったのだろう、薄いシャツ一枚で歩いて来たものだから……色々当たるのだ。おまけに良く見る為に、色々ポジションを変更する為に……更に色々当てて来るのだ。物凄く……ヤバいです。
「おまっ！　離れろ!!　熱いし髪の毛くすぐったいし良い匂いするし色々当たってるから離れろ！　後ブラ位付けろよ!?　そんな軽装で男に抱き付いてんじゃねえよ!!」
「グラム大きいから邪魔！　良く見えないから体もっと小さくなって!!」
「出来るかそんな事！」

アス：あはははははっ!!
「笑ってんじゃねえよ、助けろよ!!」
そんな事をしながら組み立てて行き、最後まで終わらせてグッタリしていたら、エルジィが俺の匂いを嗅ぎながら、髪の毛をいじり出した。
「……グラムは……良い匂いがする……髪の毛も……綺麗……どうして?」
元に戻ったエルジィを見て、あまりの人の変わり様に、ネタでやってるんじゃないかと疑いを持ちつつ、アイテムボックスからお風呂セットを取り出す。
「これが洗髪用で、こっちが体を洗う用。髪を洗ったら、こっちの液体を馴染ませてから髪をすすげば良いから。貸してやるから使ってみな」
いい加減不思議に思ったのだろう、エルジィが根本的な事を聞き始めた。
「……どうやって……色々出してる…の?　後……使い方が分からない……教えて」
「どうやって出してるかは内緒だ。教えてって言われてもなぁ……」
将来ハゲたくないから、髪の洗い方とかはネットで調べて実行していたし、その過程で女の子の髪の洗い方も知っているのだが……色々不味いと思うのだ。
「……一緒に……行こう」
そう言ってお風呂に連行されてしまった。抵抗出来ない事は無かったのだが、俺も男だし……ねぇ……ちょっとだけ期待していたのも事実だった。

＊＊＊

着いた場所はそんなに大きな所ではなかったし、お湯も何か温い。みんなが入った残り湯なのかな？　そんな事をお湯に手を入れて考えていると、エルジィが脱衣所から出て来た。

「体を隠せ！　裸で出て来るんじゃねえよ!?」

「……グラムは五月蠅い……これで良い？」

「……良くない、これでも巻いておけ」

次に出て来た時、目の粗い白い布を体に巻き付けて出て来たのだ。どうやらそれで体を拭くみたいだが、濡れたらどう考えても透けるだろ。女神様通販でバスタオルを買って、ついでに洗顔用石鹸も買っておく。

マギテックの魔法であるフラッシュライトの元、俺はエルジィの髪を洗い始める。俺の恰好はTシャツにジーンズで、濡れても構わない格好なのだが、雰囲気から言うと犬でも洗ってる気持ちになって来た。

「……気持ち良い……」

「後は自分で出来る様にしろよ。こんな所見つかったら、他の奴にボコボコにされるから、もうしないぞ」

「……洗ってくれないと……拗ねる……もう……がんばらない」

「めんどくさい奴だなぁ……でも断る！」

「え～……」

魔法の明かりの元、温いお湯でエルジィの髪を洗ったり、駄々を捏ねられて背中をドキドキしながら洗ったり、バスタオルを取ると言われたので後ろを向いたら、お湯を引っ掛けられたりしながら二人でお風呂？　に入った。ドライヤーが無いから髪をわしゃわしゃと拭いてやって、部屋まで送った後で俺も自室に戻った。

良い思いはしたと思うが、毎日これだと俺の理性が死にそうで困る。アステリア様は……

アス：自分の気持ちに正直になればいいんじゃないの？　汝束縛されるなかれ……よ。

と言っているのだが、色々と不味いだろ……そんな事を考えながら眠りについた翌日、四人の中でもダントツにピカピカになっていたエルジィに、俺と風呂に入った事をあっさりばらされて、朝からジルーネの槍の的にされかけた。

アーネシルドとエリシアは、笑いながら見ていて助けてくれないし、何もしていない事は理解してくれたが、それでもジルーネからはお説教されるしで散々だったが、それでも楽しいと思った。

エルジィは俺に懐いたのか、結構普通に話せるようになって来たから、パーティーの

仲が良くなって絆が深まったと思っておく。